

『今月の天候と農作業』

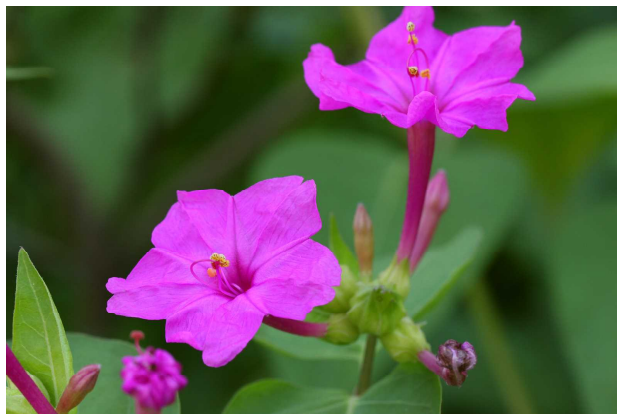
通巻第5581号

7月号

平成27年 7月 2日発行

宮 崎 県

宮崎地方気象台



<特に注意を要する事項>

日照時間が少なく、降水量の多い状態が続いています。今後も平年に比べ曇りや雨の日が多い見込みです。

【九州南部1か月予報】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

【予報のポイント】

日照時間が少なく、降水量の多い状態が続いています。向こう1か月も南からの湿った気流の影響を受けやすいため、曇りや雨の日が多く、降水量は平年より多いでしょう。

【確 率 (%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	50	30	20
降水量	九州南部	20	30	50
日照時間	九州南部	40	40	20

【概 要】

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。

週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、平年並の確率50%です。

<1週目の予報> 7月4日(土)～ 7月10日(金)

前線や湿った気流の影響で雲が広がりやすく、雨の降る日があるでしょう。

※詳しくは、週間天気予報 (<http://www.jma.go.jp/jp/week/>) を参照してください。

<2週目の予報> 7月11日(土)～ 7月17日(金)

南からの湿った気流の影響で、平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 7月18日(土)～ 7月31日(金)

太平洋高気圧の張り出しが弱く、平年に比べ晴れの日が少ないでしょう。

普通作物

◆ 早期水稲

1 水管理と防除

低温・日照不足で稲の活力が低下しています。急な落水は登熟に影響するので控えます。台風襲来時は深水とし、通過後も吹返しの高温乾燥風で登熟障害が発生するため水位は保ち、落水は収穫5日前とします。カメムシ等防除の際は、今年は稲の生育が早いので、収穫予定日を考慮し使用期限内で行います。

2 収穫と乾燥調整

収穫は全粒の8割が黄化した時期で、早刈りでの青未熟粒や、遅れでの胴割れ粒に注意します。収穫後は速やかに乾燥作業へ移し、乾燥は40度以下で行い、水分14.5～15%に仕上げます。

◆ 普通期水稲

1 水管理

中干しは茎数が20本程の頃とし、田面に足跡が軽く付く程度とします。中干し後は、走水を1～2回行い、その後は間断かん水で管理します。

2 病虫害防除と追肥

葉いもち、ウンカ類が発生しやすいのでは場観察と予察情報に注意し防除を行います。追肥は「ヒノヒカリ」では幼穂長が1㍎の頃に葉色により行います。「おてんとそだち」の施肥量はヒノヒカリより少なめに行います。

◆ 大豆

1 ほ場準備と播種

苦土石灰で酸度矯正を行い、元肥量は前作を考慮し行います。発芽が揃うよう耕耘は丁寧に行い、ほ場周囲には排水溝を設置します。播種は発芽安定と鳥害軽減のため、薬剤を粉衣し、条間60～70㍎、株間20～10㍎位で行い、覆土は2～3㍎にします。播種が7月下旬以降になる場合は密植にします。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 夏秋野菜の高温対策

中山間地域の露地きゅうり、雨よけトマト、ピーマンなどでは本格的な収穫時期です。

雨よけ栽培では梅雨明け後の高温対策が重要となりますので、ハウスは日中できる限り解放し換気に努めるとともに、寒冷紗などを利用し2割程度の遮光を行い、ハウス内の気温低下や果実や葉の温度が上がらないように管理します。

特に、曇雨天後の晴天日は萎れやすくなるので、早朝からのかん水や、翌日が確実に晴れの場合は、前日の夕方のかん水も効果的です。

なお、薬剤散布は、高温時に行うと葉焼け等の障害が発生しやすいので、午後温度が低下する時間帯に行います。

◆ いちごの育苗管理

年内の収量を確保するため、7月中旬までには採苗を終え、良質苗の生産に努めましょう。採苗後のかん水について、晴天時は早朝に充分行いますが、乾燥するようであれば午後にも夜間に過湿にならない程度にかん水します。

子苗時期の施肥量は多すぎないように注意し、施肥は鉢底から根が確認できる時期から行います。

育苗期の管理として病虫害防除が重要となりますが、炭そ病は定期的な薬剤散布を行い、発病が疑われる場合には周辺の株とあわせ直ちに処分してください。ハダニについても発生を確認したら直ちに防除を行うなど徹底した管理を行います。また、うどんこ病予防のためにも育苗床での徹底防除が重要となりますが、肥料であるケイ酸カリを1株あたり2～3g施用することにより本圃での発病を抑制する効果があります。

(黒木 正晶)

葉茎根菜類・いも類

◆ 秋冬野菜の土づくり

にんじんやだいこん、ほうれんそう、キャベツといった秋～冬にかけて栽培する作物の収量・品質を高めるためには夏場のほ場管理が重要です。土壌

pHの矯正や深耕、堆肥等の有機物の投入、緑肥栽培による土づくりを行います。

◆ かんしょ

4月植付けのマルチ栽培が収穫期となります。植付け後110～130日が収穫の目安ですが、今年は初期の低温や最近の長雨、日照不足の影響で肥大不足が懸念されます。90日を経過したら試し掘りを行い、芋の肥大状況を確認して収穫を始めてください。ただし、収穫が遅れると皮色や形状が悪化しますので適期収穫に心掛けましょう。

◆ さといも

芋の肥大には土壌水分が大きく影響します。梅雨明け後はさといもの葉面積が日増しに大きくなり、蒸散量が増加するため、早めのかん水を心がけ草勢の維持に努めてください。

3月植えの石川早生が下旬から収穫期となります。試し掘りを行い肥大状況を確認してから収穫を始めてください。また、収穫が遅れると「水晶芋」が発生し品質低下につながりますので、収穫は計画的に行い8月中旬には終了するよう心掛けてください。

中生種は7月上旬から子芋の肥大、孫芋の着生時期となります。梅雨明け頃を目安に追肥・土寄せを行ってください。また、中生種は乾燥による芽つぶれ症状が出やすいため、適宜かん水を行い品質向上に努めてください。

◆ しょうが

普通栽培では、上旬が一回目の追肥の適期となります。今年は梅雨時期の降水量が多かったため、10㎡当たり窒素成分で3～5kgを早めに施用するとともに、追肥効果を高めるために土寄せも行ってください。また、梅雨明け後は急激な気温の上昇と乾燥が予想されるので、早めのかん水を心掛けます。なお、畝間かん水をする場合は滞水しないよう注意を払ってください。

(杉村 幸代)

果樹

常緑果樹

◆ 温州みかん

7月中旬から収穫前までが仕上げ摘果の時期になります。今年の極早生温州は、全体的にある程度着果しています。

極早生温州では、7月10日の果実横径は、38～48^{mm}が理想です。結果量が多く、肥大の悪い樹については早めに仕上げ摘果を開始し、結果量が少なく肥大の良い樹については、仕上げ摘果を遅らせましょう。

結果部位によっても摘果時期が異なります。樹冠下部は早めに、樹冠上部は遅めに摘果することで、適正な肥大を確保しましょう。

樹冠上部の天なり果を摘果すると、夏枝が発生するので、収穫時に除去しましょう。

◆ 完熟きんかん

開花期のアザミウマ類や灰色カビ病の発生は、果実品質を大きく低下させます。開花期の防除を実施するとともに、枝をゆすって、花びら落としを行います。

満開期にビニル被覆を行った園地では、高温による結果不良が出始めるので、早めに除去しましょう。

◆ マンゴー

7月下旬以降の剪定は、第二新梢の充実が悪くなることから、翌年の花芽形成を悪くすることがわかっています。早めに剪定を行うよう心がけましょう。どうしても下旬以降の剪定になる場合は、夜間24度設定で加温し、昼間も換気開始温度を30度に設定することで、施設内の温度を確保し、新梢の発生と充実促進を図りましょう。晴天日の昼間については、高温対策としてサイドを開けて通気を確保しましょう。既に新梢の発生している園では、葉面散布や発根促進剤の利用、新梢の整理によって、新梢の充実促進を図りましょう。

施肥は、土壌分析の結果を見てから、必要に応じて実施しましょう。

(山口 和典)

花き

◆ キク共通

梅雨が明けると6月からの曇雨天から一転し、日差しの強い日が続きます。葉焼けなどが発生しやすい時期になりますので、本ぽでは遮光や換気を行い、葉温の低下を図りましょう。親株ほ場においては防除を徹底し、苗とともにアザミウマ類やダニ類、白さび病を本ぽに持ち込まないように気を付けましょう。

◆ 夏秋ギク

「フローラル優香」の8月出荷では花芽分化・発達を促すために消灯後から12時間日長で2週間程度のシェードを実施してください。夜間はシェードを開放し、気温が高くならないよう管理してください。高温や消灯遅れ、多肥によって貫生花の発生が多くなりますので、適正管理に努めましょう。

また、「精の一世」では高温の影響により開花遅延や奇形花が発生しやすくなりますので、日中は十分な換気を行いましょう。

◆ 秋ギク電照

「神馬」系品種は穂の冷蔵期間が長くなると定植後の活着が悪い傾向にありますので冷蔵期間は3週間を目安としましょう。「神馬66-4」「神馬2号」は高温に遭遇すると腋芽が出にくくなり、穂が不足する場合がありますので、親株床はできるだけ涼しくし、親株の株数も余裕を持って植え付けを行いましょう。

◆ 洋花類

秋に定植するほ場の土壌診断を必ず実施し、分析・診断結果に基づいた施肥を行いましょう。また、改良太陽熱消毒等の土壌消毒を実施し、連作障害の回避に努めてください。トルコギキョウ、デルフィニウムは冷房施設等を利用した育苗期になりますので、適切な温度管理を実施して、早期抽だいやロゼット防止に努めてください。

◆ ホオズキ

8月出荷分は上旬から段階的にピンチ・着色のためのホルモン処理を実施

してください。各種病害虫の防除はホルモン剤散布の1週間前までに徹底して実施してください。ホルモン剤散布後の高温は色ムラ発生の原因になりますので、散布はできるだけ涼しい早朝に実施し、散布後数日は必ず寒冷紗により遮光してください。

◆ シキミ

春に定植した苗については、梅雨明け後の急激な高温・乾燥により枯死する危険性がありますので、かん水の実施や株元に敷きわらなどを実施し、極度な乾燥を防ぎましょう。

(中村 広)

畜産

◆ 家畜

今月は梅雨が明け、本格的な夏を迎え、家畜や家禽の生産性が低下する時期に入ります。畜舎への風の通りを良くするとともに、換気扇や細霧装置を動かし、夏期対策を十分に行いましょう。また、畜舎内への直射日光を遮蔽するために、寒冷紗を設置したり、屋根散水や、屋根への石灰塗布を行うことも有効な暑熱対策となります。

乳牛に関しては、暑熱ストレスの影響が高まる時期になります。ヒートストレスメーターの温湿度指数（THI）を毎日チェックしましょう。牛舎ファンを常に回し、全ての牛に直接風が当たるようにします。牛がエサを食べるためには、水を飲む必要があります。いつでも、新鮮な水が飲めるようにしてください。また、子牛にとっても水は大事です。子牛用のバケツなどで飲水させる場合は水の交換をこまめに行いましょう。

豚・鶏では、出荷前の肉豚やブロイラーの事故率の上昇を抑えるために、飼養密度を低くして、飼養環境の改善を図りましょう。また、寒冷紗の設置で直接日光を遮り、換気扇やダクト、あるいはミスト機による散水で畜舎内の温度上昇を抑制しましょう。さらに、飼料の腐敗には十分に注意するとともに、ウォーターカップやピッカーなどの飲水の確認も十分に行ってください。

◆ 飼料作物

牛の粗飼料では、サイレージが腐敗しやすい時期になります。サイレージ

の色が黒っぽかったり、手で触って熱く感じる場合、いつもと匂いが違う場合は要注意です。絶対給与しないでください。

(三角 久志)

特用作物

◆ 茶

1 三番茶の摘採

二番茶の摘採から35日程で三番茶の摘採となります。この時期は、新葉の硬化が早いので摘み遅れに注意します。荒茶の価格と経費を考慮し、計画的で無理のない摘採に努めます。

2 病害虫の防除とチャトゲコナジラミの発生に注意

害虫では、新芽生育期に発生が多いチャノキイロアザミウマ・チャノミドリヒメヨコバイとハマキムシ類です。摘採後は、速やかに輪斑病等の防除を実施します。また、県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が確認されています。この害虫は、茶の新芽生育期に成虫となり茶園を飛び回るため、摘採時は茶園や製茶工場の生葉置き場を観察します。なお、本虫に対する問い合わせや見慣れない虫を発見した際は、最寄りの農業改良普及センター等関係機関へ連絡をお願いします。

3 更新茶園の整枝

一番茶後に中切りした茶園は、7月上旬と8月上旬に2回の整枝を行います。また、二番茶後に中切りや深刈りした茶園は、8月上旬に1回整枝を行います。整枝は、いずれも中切りや深刈りの位置から3～5割上げた位置で実施します。

4 幼木園の管理

定植当年の露地苗は根域が浅いため、梅雨明け後の干害に注意します。また、ペーパーポット苗でも、植え込みが浅くポット上部が地表から出ている場合は、ポット内の土壌が乾燥し苗が枯死することがあります。いずれも、土寄せや敷きワラ等を行い土壌の乾燥を防ぎます。

1～2年生の幼木園は、台風に備え7月中～下旬に徒長枝の摘心やせん枝を行います。また、ソルゴーの間作は防風効果が高いので台風対策に有効です。播種は、必ず7月上旬までに行います。

(黒木 清人)

◆ しいたけ

伏込み地の湿度管理と高温対策を徹底し、健全なほだ木づくりに努めましょう。

1 裸地伏せの場合

笠木を厚さ30㎝程度に補充し、直射日光による高温障害に注意するとともに、周囲の刈払いを実施し、風通しを良くしましょう。

2 林内伏せの場合

直射日光が当たる箇所には、笠木の補充や遮光ネットを設置しましょう。特に湿気が多い場合は、ほだ木の積み替えや天地返しを行うとともに、周囲の刈払いを実施し、風通しを良くしましょう。

3 人工ほだ場の場合

特に高温・乾燥の害を受けやすいため、遮光ネットによる日陰の調整や散水などにより、温度と湿度の管理を徹底しましょう。

(吉行 浩太郎)

◆ たばこ

今月は、総掻きが主な作業となります。

1 総掻きは、未熟葉の収穫を避けるため、上位本葉の成熟を確認して開始しましょう。また、成熟の目安としては葉色でなく、葉や中骨が左記の状態になっているか確認してください。

- ・葉の表面が凸凹になり先が枯れる。
- ・葉全体が下方に巻き葉柄部が下がった時（肩を落とす）。
- ・上位葉（4枚目）の中骨が白化して中骨の表面が平らになり中心に溝ができ、ポキッと明音がして折れやすくなる。

○総掻き時の注意点として

- ・着位区分は徹底しましょう。
- ・持てない流れそうな合葉の拾い取りを確実に言い、収量確保に努めましょう。
- ・上葉で標準的な心止めをした作は3～4枚を目安に区分収穫し、包内品位を高めましょう。
- ・立枯葉は活力のある内にグジリ取りを行いましょう。乾燥は、当日吊込みが良いです。

2 残幹根は土壌中の菌密度増加につながりますので、収穫終了後、早期に除去し、ほ地外へ持ち出して、耕種的防除に努めましょう。

3 異物・異臭・虫害発生防止のため、定期的な確認と作業場の清掃を行

いましょう。また、早期発売に向け、水分・異物・虫害を確認し、出荷の事前準備を行いましょ

う。
(井上 馨)

施設園芸農業者の皆様へ

自然災害等で被災した園芸用施設を再建し、速やかに経営が継続できるよう、平成27年2月から、NOSA Iの園芸施設共済の補償が拡充されました。拡充の概要は、次のとおりです。

①施設本体と附帯施設（カーテン装置等）の耐用年数が見直され、本県の沿海地域に多いAPハウス（簡易鉄骨ハウス）が7年から14年に、中山間地域に多いパイプハウスは5年から10年にそれぞれ延長されました。

②施設本体と附帯施設の補償割合が見直され、補償金額が増加します（耐用年数経過後が20%から50%に引き上げられました）。

③先述の補償の拡充に加え、農家の選択により、耐用年数内は施設の再建築価額の100%、経過後は再建築価額の75%までの補償が可能になります（ただし、追加部分の共済掛金には国庫負担はありません）。

④全施設が、撤去に要した費用を補償できるようになりました（農家選択）。

施設園芸農業者の皆様、台風をはじめとする自然災害等に備えて、災害対策の基本となる園芸施設共済に加入しましょう！

詳しくは、最寄りの農業共済組合へお問い合わせください。

(農政企画課農協農済担当)

内容の詳細について

7月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nogyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう1ヶ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稻	※※ 葉いもち 紋枯病	多 並	<p>今年には曇雨天が続き葉いもちの発生が多いため6月18日付けで穂いもちに対する注意報を発表しています。葉いもちが発生している場合は、穂ばらみ期から穂揃期の防除を確実にを行います。</p> <p>カメムシによる被害は、早期米の等級格下げの重要な要因ですので発生に注意し、確実に防除します。穂揃期とその7～10日後の2回防除を徹底します。多発して防除後も残存虫が確認される場合は、さらに3回目の追加防除を行います。</p>
	※ ツマグロヨコバイ セジロウンカ ヒメトビウンカ 斑点米カメムシ類	やや多 やや多 やや少 並	
普通期水稻	葉いもち	やや多	<p>本田での初発生に注意し、早期防除に努めます。</p> <p>移植時に箱施葉をしていないほ場では、防除が手遅れにならないように注意します。</p> <p>セジロウンカは初飛来を5/22延岡にて確認し、6月2半旬にまとまった飛来が見られています。コブノメイガは6/16に総合農試内のフェロモントラップにて誘殺を確認しています。トビロウンカの飛来はまだ確認されていませんが今後とも当センターの発生予察情報等に注意してください。</p> <p>ニカメイガは、近年飼料イネにおいて被害が広範囲で確認され、本年は早期水稻についても被害を確認しています。7月上旬中旬頃の発蛾最盛期に粒剤を施用するのが効果的です。</p> <p>スクミリンゴガイの生息数が多い場合は、捕殺するか粒剤の水面施葉を行います。</p>
	ツマグロヨコバイ セジロウンカ ヒメトビウンカ コブノメイガ ニカメイガ スクミリンゴガイ	やや少 やや多 並 — — 並	
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ タバコガ・オオ タバコガ	やや少 やや多 並	<p>アブラムシ類は、各種のウイルス病を媒介しますので育苗期から周辺の寄主植物を含めて防除します。育苗施設は野外からの飛び込みを防ぐために、防虫ネット等で被覆すると効果的です。</p> <p>ハスモンヨトウは、ふ化直後に葉裏で集合して加害しますので、この時期の発見に努め、若齢幼虫期に防除を行います。</p>
ウリ類	黄化えそ病 (MYSV)	—	<p>媒介虫であるミナミキイロアザミウマの生息密度を抑制するため、定期的に防除するとともに、ほ場周辺の除草に努めます。</p> <p>本病と疑われる症状が発生した場合は、最寄りの農林振興局・西臼杵支庁（農業改良普及センター）または当センターまで連絡をお願いします。</p>
果樹全般	果樹カメムシ類	並	<p>成熟の早いナシ・ブドウ等の果樹類を集中して加害する恐れがありますので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。</p>
カンキツ (露地栽培)	黒点病 かいよう病	やや多 並	<p>黒点病は、降水量が多いほど発生が多くなるので、前回の防除から積算降水量250^{mm}を散布間隔の目安として薬剤散布を行います。</p> <p>いずれも生息密度が高くなると防除が困難になるので、早期発見・防除に努めます。</p>
	カンザワハダニ チャノキイロアザミウマ	並 並	
茶	※※ 炭疽病	やや多	<p>発生が多いため5月28日付けで注意報を発表しています。</p> <p>二番茶残葉に炭疽病の発生がみられる茶園では、三番茶でも多発する恐れがあるため、三番茶萌芽期～1葉期に重点的に防除します。</p>
	※ カンザワハダニ チャノコクモンハマキ チャハマキ チャノホカ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ クワシロカイガラムシ チャトゲコナジラミ	並 並 並 やや多 並 やや少 —	

- 1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。
 2) ※※は注意報、※は防除情報を発表していますので、詳しくはホームページをご覧ください。
 病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。